

否かは疑問である。併し乍ら本症例はその組織学的所見より単なる骨増殖或は化生ではなく、真の骨腫であることは疑いない。尚骨腫中黄色斑の部分は組織学的には脂肪髄であつた。

本症例の原因に就ては、その発生原基が既に先天性に存在していたものであるか、或は外傷によつて骨腫形成の機転が起つたものであるか、更にはその両者であるかは断定し難い。

結 語

頭部に於ける巨大な異所形成骨腫の1例を経験したので、その概要を述べ、若干の文献的考察を加へて報告した。

文 献

1) R.A. Willis: Pathology of Tumors. London, 672, 1948.

2) 森茂樹：病理学総論，265，1959
3) 立岩邦彦：多発性軟骨性外骨腫及び所謂単発性軟骨性外骨腫。日整誌，26，2，102，昭27
4) 伊藤京逸他：腸骨翼に単発した巨大な Cartilaginaire Exstose の1例。外科，15，11，813，昭28
5) 吉田三郎他：稀有な部位に発生した軟骨性外骨腫の2例。横浜医学 4，1～2，昭28
6) 大橋良三他：外骨腫の3例。博愛医学 7；2，97，昭29
7) 小田忠良：仙骨部に発生せる骨過誤腫の1例。日外宝，24，4，435，昭30
8) 前山巖：我教室に於ける骨腫瘍。整形外科と災害外科 5，1，39，昭30
9) 狭飼敏：骨腫瘍の統計的観察。整形外科 7，3，165，昭31
10) 平田清二他：外傷後腸骨翼に発生した巨大軟骨性外骨腫の1治験例。広島医学 4，7，617，昭31
11) 土居秀郎：京大整形外科教室に於ける骨腫瘍。日本外科学会雑誌 58，2，348，昭32

5才女児に見られた気管支性囊腫の切除治験例*

大阪医科大学外科教室（指導：麻田栄教授）
鈴木 昭二・入江 義明・村川 繁雄

（原稿受付 昭和34年6月15日）

A CASE OF LARGE BRONCHOGENIC CYST IN A 5-YEAR-OLD FEMALE WITH SUCCESSFUL REMOVAL.

by

SHOJI SUZUKI, YOSHIAKI IRIE and SHIGEO MURAKAWA.

From the Surgical Clinic of Osaka Medical College.
(Director: Prof. Dr. SAKAE ASADA)

The patient, a 5-year-old female, had been susceptible to cold complaining of coughs productive of whitish sputa.

The chest roentgenograms on admission revealed a goose-egg-sized density with a clear regular border in the middle field on the right side (Fig. 1), and it was located in the central portion of the thoracic cavity in the lateral view (Fig. 2). No cavitation was found on the tomograms.

A right thoracotomy was carried out and the tumor was found to be located in the right upper lobe parenchyma, showing its smooth elastic surface and marked

* 要旨は昭和33年9月13日大阪外科集談会において発表した。

fluctuation. The right upper lobe was resected successfully, and the postoperative course was quite uneventful.

The removed specimen was $7 \times 6 \times 6$ cm in size (Fig. 3), the cut surface revealed the tumor to be cystic, its wall very thin and its contents like cheesy substance (Fig. 4). Communications between the cystic cavity and the bronchus were not found. Histological examination showed that the internal layer of the cystic wall was covered partly with typical and partly with degenerated ciliated columnar epithelium (Fig. 5, 6).

This congenital bronchogenic cyst with successful removal seems to be the youngest case in Japan.

われわれは最近、5才女児の肺内に発生した大なる気管支性嚢腫 Bronchogenic Cyst に対して嚢腫を含む右上葉切除術を行い、治癒せしめることが出来たので、こゝに報告し、ご参考に供するものである。

症 例

患者：5才，女児。昭和33年6月1日入院。

家族歴，既往歴：特記すべきものはない。

現病歴：生来虚弱で，感冒に罹り易く，その都度激しい咳嗽と多量の喀痰を招来していたが喀痰は灰白色粘液性で，血液を混じたことはなかつた。

昭和33年4月，同様の感冒様症状を来したので某医を訪れ，たまたま胸部レ線撮影を受けたところ，右胸部に異常陰影を発見され，手術を希望して当科に入院した。

現症：体格中等，栄養や不良，貧血を認めず，脈搏100，整，緊張良好，呼吸22，口腔，扁桃腺に異常なく，頸部その他にリンパ腺腫脹を認めず，腹部，四肢に著変を認めない。

胸郭は扁平で軽度の漏斗胸を呈し，胸郭の運動は左右同程度である。右前胸部中央は打診上濁音を呈し，聴診上呼吸音が微弱であるが，異常雑音は聴取しない。心尖搏動は第5肋間左乳線上に触れ，心濁音界は正常心音は清，第2肺動脈音の亢進も認められない。

検査成績：赤血球数 462×10^4 ，ザリー98%，白血球数 81×10^3 ，ヘモグラムに異常を認めず，GB: 1052，GP: 1026，尿および肝機能検査成績は正常で，心電図にも異常を認めず，肺活量は950cc。胸部レ線写真では，右中肺野に鶏卵大で境界の極めて鮮明な円形陰影を認め（Fig. 1），側面像ではこの陰影は胸郭のほぼ中央に存在し，また食道がこの陰影によつて軽度圧迫されているのが認められた（Fig. 2）。断層写真では透亮像を証明せず，気管支造影は実施不能であつた。

以上の所見から，右胸腔内充実性良性腫瘍の診断のもとに，昭和33年6月13日手術を行つた。

手術所見：笑気およびエーテルによる往復式気管内麻酔のもとに，右前側方切開を行い，肋骨は切除することなく，第4肋間で開胸するに，上葉が前胸壁および心嚢と軽度癒着しており，これを切離すると，上葉全体が大人の拳大に硬く触れ，そのほぼ中央に鶏卵大，表面平滑，緊満性で波動を証明する腫瘍を発見した。すなわち，肺内の嚢腫性の腫瘍であることが判明したので，型の如く，右上葉切除術を実施したが，気管支断端は肉眼的に正常であつた。

術後経過：順調で創は1期癒合を営み，残存肺の膨脹も良好で，1ヵ月目に全治退院した。現在術後1年を経過しているが，極めて元気で，術前の咳嗽や喀痰は全く消失している。

切除標本：腫瘍は球状で，大きさ $7 \times 6 \times 6$ cm, (Fig. 3)。フォルマリン液で固定，数日後に割を入れたところ，腫瘍は薄い壁からなる嚢腫で，中に淡黄色，チーズ様の物質が充満し，これは嚢腫壁から容易に剝がすことが可能であつた（Fig. 4）。嚢腫壁の内面は強靱な灰白色の被膜でおおわれ，嚢腫の内容には毛髪，歯牙などを認めず，また嚢腫と気管支との交通はどこにも発見されなかつた。なおこの主腫瘍の頭側に，これに隣接し2コの米粒大の娘嚢腫が認められた。

組織学的所見：嚢腫壁の一部ではその内面が気管支粘膜に見られる如き定型的な多列頭毛上皮でおおわれており，その外層に小円形細胞，線維細胞，線維芽細胞等の浸潤が見られたが（Fig. 5），大部分では嚢腫壁は変性に陥つて，主として結合組織線維から成つており，弾力線維は減少し，断裂していた（Fig. 6）。嚢腫の内容はエオジンに染色される均等，無構造の物質であつた。

すなわち，本腫瘍は気管支性嚢腫と考えられるもの

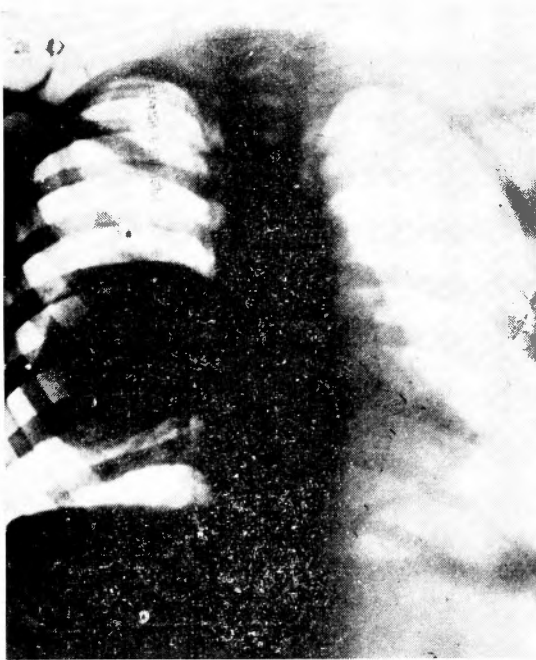


Fig. 1 Chest roentgenogram. (D→V)



Fig. 2 Chest roentgenogram. (L→R)

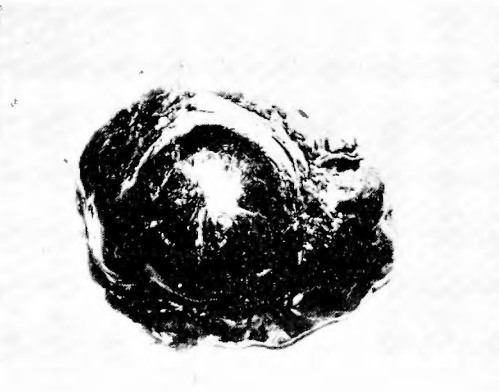


Fig. 3 Removed specimen.



Fig. 4 The cut surface.

である。嚢腫壁の大部分が頸毛を欠如していたのは、嚢腫内容と気管支との交通が杜絶したため内容が潑溜して内圧が亢進し、その圧迫により気管支上皮の変性を来し、嚢腫が増大するにつれて弾力線維が断裂し、他方結合組織の増殖が起つた故と推定されるのである。

考 察

気管支性嚢腫は1687年 Fontanus, Bartholinusが初めて記載した疾患であるが、その後1925年にKoontz¹⁾

は文献上108例を集めており、近年胸部外科が発達するとともにその切除例が漸次増加して来た。本邦においては昭和27年永瀬²⁾の最初の切除治験例以来、現在までに約100例の報告が見られる。

本疾患には Baxter³⁾, McEachern⁴⁾等の例の如く、気管支との交通を有する開放性のものと、高木⁵⁾の例や本症例の如き閉鎖性のものゝ2つの型がある。前者の開放性嚢腫は普通に見られる型で、咳嗽、喀痰、血痰等を来し、レ線写真では嚢腫様乃至空洞様陰影を示

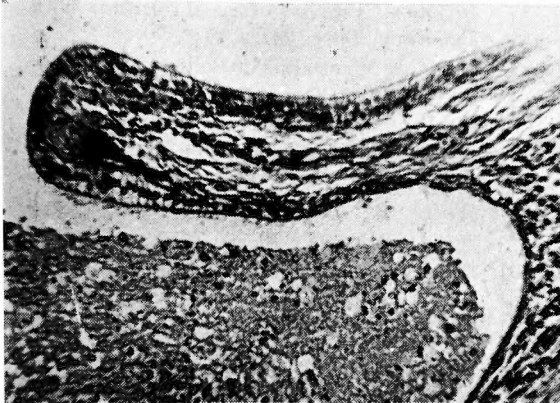


Fig. 5 Typical ciliated epithelium of the bronchogenic cyst. (H. E., ×100)

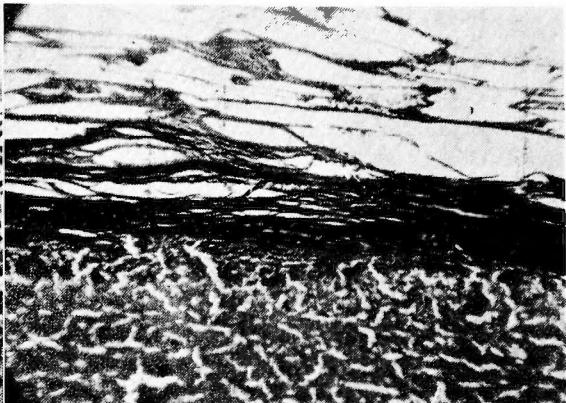


Fig. 6 Degenerated epithelium of the cystic wall (van Gieson, ×50)

す。そもそももしも気管支との交通部に Ball-valve action が発生すると、呼吸循環系障害すなわち、高度の呼吸困難、チアノーゼ等を招来するのである。⁴⁾⁶⁾これに対し、後者の閉鎖性嚢腫は自覚症状が少なく、咳嗽のみのことが多く、レ線上是充実性陰影を現わすものである。ところで Davis⁷⁾ が肺内で充実性陰影を示すいわゆる Solitary Pulmonary Nodule (彼はこれを次の如く定義した— (1)直径6cm以下で、(2)孤立性で、(3)含気性の肺実質によつて囲まれており、(4)形は円形または楕円形で、(5)境界は鮮明且つ平滑で、(6)空洞像や石灰沈着が証明されず、(7)肺化膿症、無気肺、所属リンパ節腫脹等が共存していても通常軽微である) の215例を組織学的に検索した結果は Table の如くであつて気管支性嚢腫はその中の僅か3例にしか認められなかつた。⁷⁾すなわち充実性陰影を示す気管支性嚢腫は比較的稀といえるのである。しかも本症例ではかなり大きい陰影を示したので、既述の如く術前に充実性良性腫瘍を疑つたのであつたが、開胸により初めて嚢腫なることが判明した次第である。

もともと本症は先天性疾患に属するので、若年者によく見られる筈である。Herrmann⁸⁾ は生後6ヵ月から9才までの乳幼児の本症8例に対し、肺葉切除術を実施したところ、多量の汚染された内容物によつて感染を生じて2名が死亡したと述べているが、このような事実からも本症は発見され次第、二次的感染等の合併症が起る以前に速かに積極的に根治切除療法が実施されることが望ましいと思われる。

本邦における若年者の手術例としては陳の9才⁹⁾ 江草の7才¹⁰⁾、高木の6才⁵⁾、等があげられるが、われわれの5才の切除治験例は本邦における最年少例で

Table

215 Solitary pulmonary nodule (Davis, E. W.)	
LESION	CASES
Bronchogenic carcinoma	79 (36.7%)
Squamous carcinoma	
Adenocarcinoma	
Bronchiolar carcinoma	
Undifferentiated carcinoma	
Bronchial adenoma	9
Fibrosarcoma	1
Leiomyosarcoma	1
Lymphomyosarcoma	1
Metastatic tumor	10
Total malignant	101 (47%)
Granuloma	82 (38.1%)
Hamartoma	9
Pleural mesothelioma	6
Chronic pneumonitis	4
Bronchogenic cyst	3
Bronchopulmonary sequestration	3
Neurofibroma	2
Chronic lung abscess	2
Lipoid granuloma	1
Hyperplastic lymph node	1
"Aspergilloma"	1
Total benign	114 (53%)

ある。

む す び

5才女児の大なる気管支性嚢腫に対し、これを含めて上葉切除術を実施し、治癒せしめ得た1例を報告し、1, 2の考察を加えた。

文 献

- 1) Koontz, A. R.: Congenital Cysts of the

- Lung., Bull. Johns Hopkins Hosp. **37**, 340, 1925.
- 2) 永瀬十郎, 他: 巨大なる気管支性囊腫の切除例 臨床外科, **7**, 737, 昭27.
- 3) Baxter, S. G. et al.: Development of Bronchial Cysts., Ann. Int. Med., **38**, 967, 1953.
- 4) McEachern, C. G. et al.: Lobectomy for Congenital Cystic Disease of the Lung., J. A. M. A., **151**, 992, 1953.
- 5) 高木彬, 他: 縦隔洞気管支性囊腫の1治験例. 胸部外科, **10**, 464, 昭32.
- 6) Burnett, W. E. et al.: Lobectomy for Pulmonary Cysts in 15-Day-Old Infant with Recovery., Surg. **23**, 84, 1948.
- 7) Davis, E. W. et al.: The Solitary Pulmonary Nodule., J. Thoracic Surg., **32**, 728, 1956.
- 8) Herrmann, J. W. et al.: Bronchogenic Cysts in Infant and Children., J. Thoracic Surg, **37**, 342, 1959.
- 9) 陳武州, 他: 左肺葉間に発生した肺囊腫と思われる1小児治験例, **10**, 390, 昭32.
- 10) 江草腎次, 他: 小児における縦隔腫瘍の1治験例, 胸部外科, **9**, 449, 昭31.

19才女子に見られたいわゆる Alveolarzellkarzinom の1例

大阪医科大学外科学教室 (指導 麻田 栄教授)

入江 義明・高山 晴夫・村川 繁雄

(原稿受付 昭和34年6月15日)

ALVEOLARZELLKREBS BEI EINEM 19 JÄHRIGEN MÄDCHEN

Von

YOSHIAKI IRIE, HARUO TAKAYAMA und SHIGEO MURAKAWA

Aus der chirurgischen Klinik der Osaka Medizinischen Akademie
(Chef: Prof. Dr. SAKAE ASADA)

Ein 19 jähriges Mädchen litt unter Husten, blutigem Auswurf und Brustschmerzen. Eine Probethorakotomie, die 3 Monate nach dem Beginn der ersten Krankheitssymptome vorgenommen wurde, ergab neben einem gänseeigrossen Haupttumor im rechten Oberlappen eine karzinomatöse Dissemination der Pleurabätter. Nach der operation trat das sog. "Obere Hohlvenensyndrom" auf und die Patientin starb am 45. P. O. Tag unter Dyspnoe. Der mannesfaustgrösse Haupttumor des rechten Oberlappens zeigte histologisch das Bild des sog. "Alveolarzellkarzinoms." In der Vena cava superior war infolge der krebsigen Infiltration vom Haupttumor her ein Geschwulstthrombus entstanden. Als Fernmetastase wurden im Grosshirn Geschwulstzellen beobachtet. Über die Histogenese werden verschiedene Ansichten geäussert. Nach dem röntgenologischen Verlauf dürfte bei unserem Fall Wohl die primär unizentrische Genese zur Geltung kommen. Das Alveolarzellkarzinom bei einem 19 jährigen Mädchen ist ein sehr seltenes Ereignis, deshalb es hier eine Veröffentlichung findet.

われわれは最近肺腫瘍の中では比較的稀ないわゆる
Alveolarzellkarzinom 肺胞上皮癌の1例を経験した

ので, ここに報告し若干の考察を加えたい.